

## 授戒のススメ

この度、福巖寺において、授戒会を執り行うこととなりました。

授戒会とは、仏の教えと「戒」を授かり、自らの余生に誓願を立てる儀式です。その証として導師から戒名を頂きます。

茶道や華道などで、ある程度修行を積むと、家元や師匠からその道での名前をもらいます。それと同じように、これまでの人生を振り返って反省し、「今後は御釈迦さまの教えを守って生活をします」と約束し、正しい生活に入る誓いをたてた際に授けてもらうのが戒名です。

戒名は死後にもらうものだと勘違いしている人が多いのですが、本来は、生前に授かるものなのです。戒とは道徳のことです。道徳は人々を不幸にならないようにするための道しるべです。道徳さえ守っていれば、不幸になりません。幸福になります。戒を授かり、戒を指針として人生を歩むことによって、生前にも、死後にも安心が得られるのです。

授戒の由緒は、仏教伝道に由来します。

仏教がはじめて日本に伝えられたのは、538年、あるいは552年と言われています。百済（現在の韓国）からの使者によって、仏像と経典が朝廷に献上されました。以降朝廷は、仏教を国教として採用しましたが、当時の日本には戒律に長け、きちんとした仏教を伝えられる僧がいませんでした。そこで、中国に遣唐使を派遣して、唐から戒律に長けた僧侶を招くことにしました。そして754年、ついに奈良の東大寺に鑑真和尚を招いて、朝廷の高官を対象とした大規模な授戒が行われたのです。このとき日本で戒を授かった第一号が、聖武天皇です。戒名は、「勝満」と授けられました。これが日本での授戒会の始まりです。

その後も、皇族、武士らの間で授戒をして仏弟子となる人々が増え、仏教は日本に深く浸透していったのでした。上杉謙信、武田信玄など、誰もが知っている武将の名前も実は戒名です。謙信の俗名は輝虎、信玄の俗名は晴信といえます。

ところが室町時代に入ると、葬儀の時に間に合わせて授戒を行って戒名を授かる習慣が広まり、生前授戒を修行する人が少なくなったのです。

しかしながら、戒を受け、戒名を授かることは、人生に明確な道しるべを授かることと同じです。

授戒は迷いや苦しみを離れ、日々の生活に明るさと勢いをもたらします。

授戒会は生涯忘れられない体験として、貴方の余生に豊かさと明確さをもたらすことでしょう。

時々、「自分は戒を授かるほど立派な人間ではないから、」と遠慮する人がいますが、逆です。完璧でなく、欲や怒り、愚かさに満ちた人間だからこそ、生前に授戒会に参加して、少しでも心の平安を得て頂きたいのです。

ぜひこの機会に、ご家族や知人をお誘い合わせの上、授戒会に参加していただくことをお勧めします。

福巖寺 住職

大忠元師

合掌

